

インタビュー

# 文明史的視点から見るコロナ問題

—歴史人口学者鬼頭宏氏に伺う—

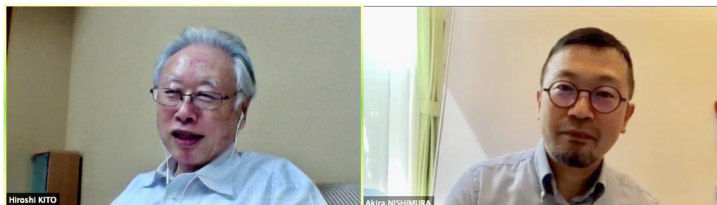
鬼頭 宏<sup>1</sup>

聞き手 西村 明<sup>2</sup>

(2020年7月20日(月) Zoomにて実施)

2019年12月、中国・武漢市で新型コロナウイルス(以下、コロナウイルスまたはコロナ)感染症が発生して以降、世界的に大きな混乱が生じ、仕事や日常生活の場においてとっさの対応が迫られた。こうした混乱のもとでは、社会全体がえてして近視眼的になりがちで、ますます不安が増幅される状況が様々な場面で見られる。そういう時こそむしろ、立ち止まって自分たちの置かれた状況を冷静に見つめる必要があるだろう。特集テーマの「宗教と感染症」を考えるに当たり、現今のコロナ禍の混迷状況を相対的・大局的に捉えかえすために、歴史人口学とともに文明史や環境史の視点を踏まえた様々な角度から、日本社会における人々の営みを研究してこられた鬼頭宏先生にお話を伺った。

まず前半では、コロナの流行とそれをめぐる対応のあり方について、近世・近代の疫病の流行史を踏まえつつ、先生の視点からどのように見ておられるのかについてお尋ねした。後半の話題は、人口の増減や移動、仏教的には「生老病死」と表現できるような人々の生き様の問題など、現在、そしてこれからの宗教のあり方にも直結する問題にも及んだ。



(Zoomでのインタビューの様子)

<sup>1</sup> きとうひろし：静岡県立大学学長

<sup>2</sup> にしむらあきら：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授、(公財)国際宗教研究所理事

## コロナ感染者数と人口密度

**西村** 私は日本の宗教史や民俗学に近いところで、生活者の視点を意識して民間信仰などを研究してきました。しかし同時に大局的な視点も必要だと思うことが多々あり、歴史人口学の知見に学びたいと思っていたところです。まずは今回の新型コロナウイルス感染症について、特に感染者数や、人口密度の問題との関係で、先生が現状をどう捉えられているのかについてお伺いできればと思います。

**鬼頭** 少し前置きをすれば、私が大学に入った頃に、私の指導教授がヨーロッパから持ち込んだ歴史人口学の方法を日本に導入しようとしていました。面白いことに、ヨーロッパで利用されたのが、洗礼、結婚、埋葬を記録したキリスト教会の教区簿冊 (parish register) というもので、日本ではキリシタン弾圧のために作られた宗門人別改帳が用いられました。いずれも宗教と関わる史料から歴史人口学の研究がスタートしています。

中高校生の頃は民俗学に興味を持っていて、人々の日常の暮らしについて勉強したいと思っていました。経済学部では非常に抽象的な議論が多い中で、歴史のほうには歩み寄れるのではということで、経済史のゼミに入ったわけです。そうしたら、2019年12月に亡くなった、当時はまだ若手の速水融先生<sup>1)</sup>がたまたまいて、なにか面白いことをやっているということで師事しました。

歴史人口学は英語ではヒストリカル・デモグラフィーと言いますが、デモグラフィーの意味はポピュレーション・スタディーズにはとどまらない。つまり、人間の頭数およびその変動について研究するのが狭義の人口学だとすれば、歴史人口学のほうは、過去に生きた民衆の生きざまの研究であることを学び始めてから知りました。これはまさに、私が高校のときにやりたかった民俗学と共通していたわけです。

当然生物学的な生命を対象とする面は強いけれども、同時に、人がどのように行動し、その一生を送ったかを考えるとどうしても宗教的な問

題に触れることになる。私自身はそちらは全く素人で勉強しませんが、マンタリテ（心性）というもの、これがまた人口行動に大きな影響を与えていくのも事実だと思います。そういう点で、こういう交流の刺激から、両方の分野に何らかの実りがあるのではないかと思って、今回の対談をお引き受けしました。

**西村** ありがとうございます。

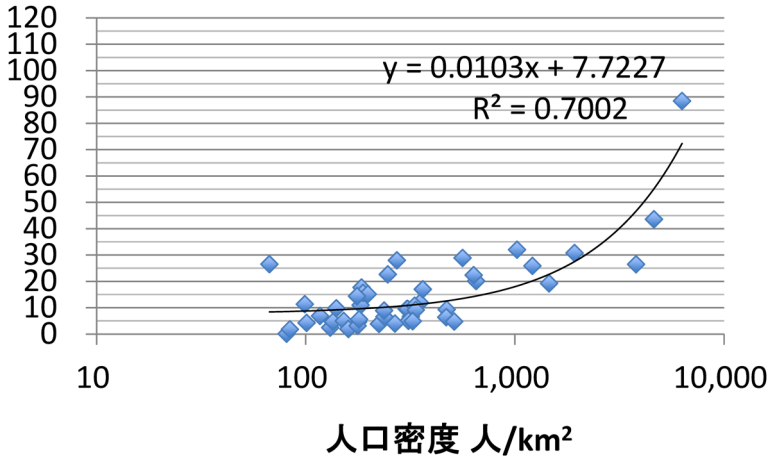
**鬼頭** それで、ただ今のご質問ですが、人口密度との関係ということでは、新型コロナウイルス感染症は人口密度依存型か、人口密度と非常に密接な関係を持った感染の仕方をしているということを痛切に感じました。人口密度と死亡率、あるいは病気との関係というのは早くから指摘されていて、江戸時代にも気付かれていました。人口学者たちは、ヨーロッパでは「都市＝墓場説」、つまり都市とは墓場みたいなものだと考えました。今年、ヨーロッパなどで新型コロナウイルスによる死亡者が次々に土葬される様子がテレビに映りましたが、「都市＝墓場説」をまざまざと見せつけられた思いです。14世紀のペストやその他の疫病の場合でも同じようなことが繰り返されたのだらうなと思いつつ見ていました。日本では、速水さんの造語で、「都市＝蟻地獄」<sup>2)</sup>と表現されました。入るとなかなか抜け出せない、最後は食われてしまうという意味で。

交通事故や犯罪による死亡については都市のほうが多いかもしれませんが、現代では明らかに都市のほうが病気による死亡率が高いということはないわけです。むしろ、救急病院や、いろいろな点で都市のほうが命が救われる機会が多いこともある。しかし日清戦争から日露戦争に移る1900年前後まで、全体的に都市の死亡率のほうが農村よりも高いという傾向が見られました。それが、20世紀に入ると大きく改善されてきたから、ほとんど忘れ去られていた事実でした。

この度の新型コロナウイルス感染症は、人口密度と関係あるだろうと、都市＝墓場説に準じて、2月から都道府県別の発生件数を追跡して

都道府県別人口密度と感染者数 (2020.07.31 現在)

## 人口10万人あたり陽性者



感染者数と人口密度の相関係数 (2020年2月25日～8月28日)

## 相関係数 r

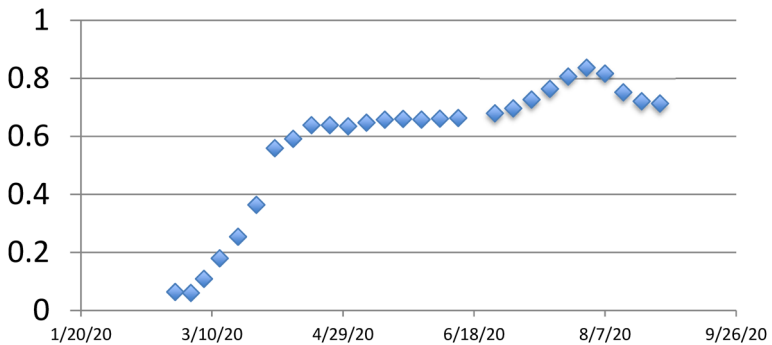


図1 都道府県別人口密度と感染率の関係 (鬼頭先生提供)

図表化してみました(図1)。3月の中旬まではあまりはっきりした傾向は見えなかったのですが、3月下旬から急速に人口密度と、人口10万人あたりの都道府県の感染者数とが密接に関係を持つ様子が見えてきました。7月末にその関係は最も強くなっています。人口密度の高い東京

で一番たくさん感染者が見つかるのに対して、密度の低い岩手県は7月中旬までゼロであるというように。これは極端な例ですが日本全体でそういう傾向が強く見られることがよく分かりました。そういう点では、3密を回避するとか、ソーシャルディスタンスを保ちましょうということは誠に正しい予防策だと思います。

全国の知事会でも新しい日本の国土の形を、多極分散型、あるいは多極連携型の国土経営にすべきだという意見が出ていますが、そのとおりだなと思いますね。

**西村** 今回のコロナウイルスの状況というのは、例えば、先ほど触れられた日清・日露戦争の頃は、コレラが流行し、第一次大戦の時には速水先生が『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ：人類とウイルスの第一次世界戦争』（藤原書店、2006年）で取り上げられたように、スペイン風邪の流行が非常に特徴的でした。それらと比べた時、今回のコロナ流行には共通性や違いはあるのでしょうか。

**鬼頭** 私も新型コロナウイルス感染症が流行り始めて、すぐに想像したのがスペイン風邪、スペイン・インフルエンザとの比較です。新聞なども盛んに取り上げて、特に日経は連載記事を何回も載せていました<sup>3)</sup>。インフルエンザの場合も死亡率と人口密度との関係が深いと思って図にしてみたのですが、実際にはほとんど関係ないのです。これは死亡率であって、感染率ではないということかもしれませんが、死亡率には地域的な相関関係がない。これは、もしかしたら今回のコロナの場合には、まだ拡散の途中の段階かもしれず、最終的に、爆発的に感染が広がって、日本中どこでも誰でも罹るようになったとすると、一定の割合で感染することになって人口密度との関係は消えてしまうのかもしれない。1、2年経ってみないと本当の違いは分からないのではないかなと思います。

## ジャーナリズムの反応

**西村** 先ほど日経の話が出ましたけど、ジャーナリズムの取り上げ方で何か特徴がありますか。

**鬼頭** 全く病気の専門家ではないのに、速水先生の意外な遺産かもしれませんが、その関係で幾つかの新聞社や雑誌社から取材がありました。一つは、スペイン風邪との比較で何か新しいことが出てこないかということ。もう一つは、人口密度との関係で言えば、大都市居住は危険ではないか、地方への居住がこれから進むのではないか、ということでした。もう大都市では高層アパート、タワーマンションの価格が下がっているのではないかとか、オフィスの価格が下がっているのではないかとか、そんな議論がかわされました。それともう一つは、これは週刊誌、少し軽い話なのですが、ステイホームでみんな家にいると、夫婦が仲良くなって出生率が来年は高まるのではないかという、想像なのか期待なのか分かりませんが、そういう議論もありましたね。

あと、私がジャーナリズムを通じて真剣に考えなければいけないと思ったのは、もし、イタリアなどでも見られたような医療崩壊が起きて、そして、生き延びる可能性のある人だけを助けようとする判断が起きるのではないか、つまりトリアージをめぐる問題もいずれ覚悟しなければいけないのではないかと感じました。

そういうふうには、ジャーナリズムの関心というのは多岐にわたっていますが、今回特に印象に残ったのは、文明とか、宗教とか、人間の生き方、考え方、価値観という問題にも踏み込んだ特集記事がたくさん出た。これはこれまでなかった大きな特徴だと思っています。

**西村** 東日本大震災のときも、原発の問題や、あれだけ多くの人が同時に亡くなるということ、戦後以来日本社会は経験していなかったショックで、文明論的な捉え返しの機運もあり、「無縁社会」への反省から「絆」ということが強調されました。その方向で、宗教界でも社会

貢献への努力が見られ、近年では子ども食堂への取り組みなども目立ってきました。

今回は逆に、近寄ってはいけないということであったり、絆の強調ができない状況に追い込まれたりしています。適切な距離感ということはどう考えていけばいいのかが問い返されているようです。

## 日本の歴史に見る人口の推移

**西村** ところで先ほど、歴史人口学のアプローチの宗教との関連性に言及がありましたが、例えば、宗門改帳や過去帳から見えてくる世相というのはどういう特徴があるのでしょうか。

**鬼頭** 江戸時代は非常に特殊な時代で、一人一人の生きざまを追える宗門改帳のような史料があって、自由にそれを利用することができます。



### 鬼頭 宏 (きとう・ひろし)

静岡県立大学学長。上智大学名誉教授。修士（経済学）。歴史人口学、経済史。主な著書に、『人口から読む日本の歴史』（講談社、2000年）、『文明としての江戸システム』（講談社、2010年）、『環境先進国 江戸』（吉川弘文館、2012年）、『愛と希望の「人口学講義」』（ウエッジ、2015年）。

2020年は国勢調査開始100年の年に当たりますが、日本では調査の個票の利用は困難です。個人情報保護のために厳しい条件があり、個体そのものを対象とする個別事例研究は認められていません。

その点で言うと、江戸時代は本当に一人一人の一生を何万人も、あるいは、もしかしたら何十万人も追うことができるという非常に稀有な時代です。

過去の人口をずっとつないで見ると、人口は、近代に入って増えたと思われがちですが、実はそうではない。同じぐらいのスピードで人口が増えた時代は、過去に何度もあった。それから今、人口が減少していますが、これも日本史上初めてではなく、人口が減少した時代、あるいは停滞した時代は過去に何度もあった。江戸時代は前半の人口増加と後半の人口停滞がセットでみられた時代でした。これは文明の盛衰や気候変動と非常に密接な関係を持っているだろうと思っています。

縄文時代は前半に人口が増えますが、中期以後はかなり気候変動の影響を強く受けて減少していく。あるいはもしかしたら、縄文時代の終わり頃に中国大陸や朝鮮半島から渡って来た人たちが、新しい病気を持ってきたということも考えられないではないと、人類学者は言っています。

稲作が入ってきて、水稻農耕化により、農業文明へと移行していくと人口が徐々に増えていく。ピークは奈良時代から平安時代にあったと思いますね。600万とか700万ぐらいまで増えたと見られています。ところが、平安時代、あるいは平安から鎌倉にかけて、また人口が頭打ちになる。若干減ったとも言われています。この原因が何なのか、よく分かりません。病気だと言う人もいます。特に8世紀、東大寺が造られますが、そのきっかけになったのは天然痘で、大勢の人が死んだ可能性がある。それから、気候の温暖化によって日本が乾燥気候に見舞われて、大きい飢饉が頻繁に起きたということもある。それが平安時代に人口を停滞させたのではないかとされています。

ところが、室町時代に入ると、またじわじわと人口が増えていった。そこから江戸時代の前半にかけて人口が急増したことは、はっきりと分



かっている。ところが、18世紀に入って徳川吉宗の時代の辺りから1世紀あまり、人口がまた停滞する。室町から江戸時代前半にかけて人口が増加したのはなぜか。いろいろと説がありますが、やはり、農業生産力の増大がありますし、その背景には貨幣経済、市場経済化の展開が刺激になっているだろうという説があります。また、中国人やヨーロッパ人が持ってきた新しい文物や技術、新大陸由来の新しい物産が取り込まれて、文明として、それ以前の農業社会とは大きく変わったという事実があります。

しかし、限られた国土の中で、エネルギーや食糧を自給しなければならない状況ではやはり限界があって、人口が3200万~3300万のところで頭打ちになる。ちょうど人口が天井に張り付いているところへ気候寒冷化が起きて人口が増えなかった。18世紀後半には、人口が3000万人を割る水準にまで減少します。その後、幕末から明治にかけて、工業化を目指して社会が大きく変わっていく。これが人口増加をもたらしたということは統計的にはっきり分かるし、皆さんよくご存じのことですね。

ところが、人口はまた、21世紀に入って減少に向かっている。どこまで続くか分からない。坂道を転げ落ちていくようなちょっとした恐怖を感じないではないということです。だけど、この21世紀の人口減少は、過去の人口の波動的な変化を考えると、起こるべくして起きたと考えなければいけないだろう。われわれは、過去の人口の変動がなぜ起きたのかということ、そして、人口が減退していく時期というのはどんな時代なのかということをよく考える必要があると思います。

## 1970年代のターニングポイント

**鬼頭** 今、人口減少というのは起こるべくして起きたということを申し上げましたけども、むしろ意図されたものであったと言ってもいいと思う。

**西村** それはどういう意味ですか。

**鬼頭** 西村さんはお生まれはいつですか？

**西村** 1973年、第二次ベビーブームです。

**鬼頭** ちょうどその時代ですが、1973年の10月にオイルショックが起きた。そして、その翌年が一つの大きな転機になったと思いますね。既に60年代から環境汚染、環境破壊ということが言われ始めていました。当時はまだ「公害」という概念が強かったと思いますが、観点がだんだんと地球環境にまで広がっていく時代でした。その頃の世界人口は40億人に向かって、途上国だと年率3パーセントぐらいの勢いで増えていました。人口爆発や経済成長が起きているということで、これで大丈夫だろうかという懸念が出てきたのが70年頃ですね。

例えば、ノーベル物理学賞を取った科学者のデニス・ガーボルが1972年に『成熟社会』を書いて、量的な発展はもう望めない、生活の質を高めていくことに方向を変えなければいけないと言われるようになった。それから、同じ年にはローマ・クラブの報告書として、マサチューセッツ工科大学のデニス・メドウズたちが『成長の限界』を出している。そういう意識がだんだん持たれてきたのが70年代だろうと思います。そこに、1973年にオイルショックが起きて、資源の枯渇はどうも本当らしい、そうしたらトイレトペーパーや洗剤はなくなるは、車も動かないは、大変なことになるということを疑似体験させられたということだと思います。

その翌年の1974年に何があったかということ、日本で戦後2回目の人口白書が『日本人の動向』というタイトルで出て、そのサブタイトルに「静止人口をめざして」と掲げられました。当時、人口が年率1パーセントの割合で増えていたのですが、これを止めて人口を静止させよう、増えない、減りもしない状態に持っていこうということが強く謳われた。その上で、人口が維持できる水準よりもわずかに出生率を落とせば、昭和85年(2010年)までは人口が増えるけれども、2011年からは人口は減少に転じるという推計を示したのです。

実際はどうなったかという、日本の人口は2008年がピークでした。だから、ほとんど当たっているわけです。当たったのは白書のせいだけではなくて、白書の刊行に呼応して、国会議員、経済学者、社会学者、小松左京さんのような作家も入って、3日間にわたって日本人口会議を開いたのです。マスコミは大々的に取り上げます。それはそうでしょう、オイルショックの翌年で、成長が本当に続くのか、資源は大丈夫かというのが疑問になってきた時代。そこで打ち出したスローガンが「子どもは2人まで」。今なら「2人は生みましょう」となるかもしれませんが、当時は2人までに抑えましょうということですよ。その当時、青年だったのがわれわれ、団塊の世代ですよ。第二次ベビーブームとさっきおっしゃいましたが、その親の世代ですね。

そういう意識が非常に強く浸透する。もちろん、それだけではなくて、グローバル化が労働市場を悪化させたこともあります。世界の論調として人口抑制の方向へ動いた。この1974年8月には、国連が初めて政府レベルの世界人口会議を開きます。その目的は、途上国の人口爆発を抑え込もうということです。ただ、そんなに話は簡単ではない。これから成長していかねばならない途上国は労働力不足で、消費人口も欲しいから、人口増加を抑えろなどと先進国が口出す話ではないと言うわけです。もっとも、反対した筆頭はもちろん中国、インドですが、どちらの国も70年代の終わりには、中国は極端な一人っ子政策、インドでもガンジーの時代に断種手術を中心としたかなり強制的な人口抑制政策に乗り出しました。

ですから、70年代というのは資源の枯渇の問題、現代流に言うなら持続可能性の問題が世界中の課題になってきて、途上国もそれに乗らなければならない状況に追い込まれた時代だと言えます。その結果が少子化であり、人口減少であると思います。ですから、今起きている現象は短期的な経済の悪化や、低成長の時代の労働市場の悪化に伴うものと単純に考えるべきではなくて、文明史的に見て、産業文明が限界に達したことをきわめて象徴している現象ではないかと思っています。

それと、もう一つだけ付け加えて言うと、いつの時代でも疫病や災害

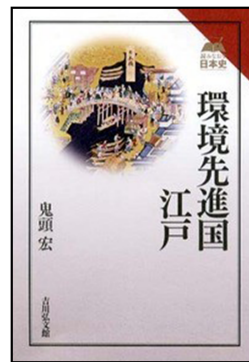
は怖いわけですが、人口減少や人口停滞の時代にやって来るのがもっと怖い。というのも、人口が増加している段階ではちょっとした飢饉が2、3年続いても、すぐに人口は戻る可能性がある。ところが、18世紀から19世紀にかけて起きた江戸時代後半の三大飢饉が恐れられたのは、人口低成長の時代だったからです。結婚年齢が高くなり、夫婦が子どもを産まなくなっている。というのも、人口を増やそうとしても新田開発する土地がない。あったとしても、海の干拓などの非常にコストのかかる投資が必要になってくる。だから、一般の農民はなるべく子どもを産まないようにして出生率を落としている。そういうところへ飢饉が来たり、疫病がはやると、そこからの回復は非常に時間がかかる、あるいは回復できない状況が生まれる。今もそうですね。

## 資源や寿命の有限性

**西村** 特に今の人口減少という問題は、自分の人生以上に時間軸を伸ばさないで考えると、空前絶後ではないかという怖さを感じますが、そういうことではなくて、過去にも人口が増えたり減ったりしながら来ていて、人類史的に見れば非常に大きな人口のピークが来て、下がりつつある時期だということですね。

先生の『環境先進国・江戸』（吉川弘文館、2012年）では、いろいろな形で人々の対応が描かれていますが、江戸時代の人の暮らし方を今の状況に照らしてみたときに、われわれが何をそこから学ぶべきかについては、どのようにお考えですか。

**鬼頭** 難しいですね。江戸時代の人にも初めは開発至上主義で勝手気ままにやっていたからね。結果とし



鬼頭宏著（2012）  
『環境先進国・江戸』吉川弘文館

と言えることは、彼らは迷信を信じたりして、非常に非合理的な面が強いのですが、経済面では経済合理性にのっとった行動をしていたと思います。

それともう一つ、当時は家制度の社会であって、血縁者からなる3世代世帯が当たり前であった。これが江戸時代前半の人口増加につながったと考えられます。その後200年ぐらいにわたって、あるいは現在まで、その影響が強く残っていると思います。子孫を残し家の永続を守るという命題と、しかし、むやみに人口は増やせないというもう一つの制約とのバランスをうまく取りながら生きてきた人たちなのではないでしょうか。もちろん、個々の世帯とか、個々の夫婦がうまく適応したということではなくて、その中には途中で消えてしまうような零細な農民もいて、全ての家系がずっと現代に残ったわけではない。貧富の格差が大きい階層社会で、持続可能性ということを意識はしなかったろうけども、結果として環境、資源の状態と自分たちの行動をうまく結び付けて社会を安定させてきた人たちではないでしょうか。

江戸時代にはSDGs (Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標) の考え方はもちろんありませんが、熊沢蕃山が『大学或問』で取り上げたように、森林の過剰な伐採が資源の枯渇を招き、洪水発生に結びつくことを警告する学者がいました。幕府の法令にしても、藩の規制にしても、農民自身の行動にしても、資源の節約や保存であるとか、持続可能な形で資源を利用していこうという工夫をしました。リサイクル、リユース、リペアであるとか、いろいろな資源節約型の、あるいは循環型の社会をつくったという点では、徳川日本は評価されてしかるべきだと思いますね。

われわれは今それを、意識的にまねをしようとしているわけです。ただ厄介なのは、当時の資源のほとんどが金属と石と、それから木材、竹、紙、布などの有機物ですよ。だから、自然に戻りやすいものばかりで、循環型の社会をつくりやすい。今は、そこへプラスチックなどが入ってきているわけですから、非常に困難であることは確かです。だけど、やってやれないことはないので、プラスチックをなるべく節約して

他の原料に替えていくということで、新しい次元の循環型社会の実現は可能だと思っています。しかしやはり、安定した状態になるまでには時間がかかるし、安定した頃には、また次の新しい技術が出てくる、あるいは社会がまた変わっていかざるを得ないということになるのではないかと思います。

それともう一つ、われわれが今模索していることは、宗教と関係すると思いますが、人の生き死についての考え方、あるいは一生の過ごし方です。江戸時代には与えられた寿命の中でどのように人生を過ごしていくかということについて一つの形ができていたのだろうと思いますね。人生、出生時の平均余命でいうと40年にも満たない、現在の半分以下の寿命でしかなかったけれども、その中で、例えば、生涯どのように過ごすか、年齢をどういうふうに分けるかとか、年齢ごとの役割をどうするかなど、だんだん模索していった安定した社会になった。われわれは逆に、そこから抜け出せなくて、長寿命という新しい状況に適応しかねているというのが現実かなと思います。

「7歳までは神のうち」という言葉があります。ひと頃まではよく聞かれたこのことわざには、二通りの解釈があるのではないかと思います。当時は寿命が短かったが、特に寿命を短くしていたのが子ども、特に乳児死亡であるということです。前近代の乳児死亡率はおおよそ3割と言われますが、日本の場合、もう少し低くて、それでも生まれた子どもの20パーセントぐらいは1歳の誕生日を迎える前に死んでいるという社会です。そうすると、子どもの死に対しては、いつ命が取られてもしょうがないといった考え方で、7歳までは神のうちで、あの世にまた連れ戻されるというふう考えた。いわば、悲嘆を軽減させる慰めになったのではないか。

それともう一つは、通過儀礼をみんなが大事にしてきたことの意味です。生まれて産湯を使い、お七夜を過ごし、お宮参りをし、お食い初めをし、それから、初節句を迎え、誕生祝いを迎え、そして、七五三、そして成人式という具合に、生まれてから成人するまでの間、十数年、必要に応じて通過儀礼を祝ってきた。だんだん命がしっかりしてきて、死

なくなってくるといふことともそれは関係するし、それに応じて、社会に受け入れられて、社会の中での存在がだんだんしっかりしたものになっていくというプロセスでもあった。だから、乳児のうち、非常にはかない存在であって、いつ死んでもおかしくないといふことで慰めでもあったと同時に、子どもが多過ぎて困るといふときには捨て子をしたり、あるいは生まれた子どもを殺してしまったり、嬰兒殺、あるいは間引き、墮胎を行うことについて罪の意識を軽減させたのかもしれない。もちろん幕府は禁止しますが、平気でとは言わないけれども、民衆の間ではそういうことを行う風習がないわけではなかった。「7歳までは神のうち」といふのは、非常に両義的な意味を持っていたのではないかと思います。そういうふうな、その社会の中でのうまく一生を過ごす上での知恵といふものかな。現代人から見ていい悪いで言えば、当然悪いに決まっていますが、工夫してライフスタイルをつくっていったといふことだと思います。

われわれはやはり、環境との関わりと、それから、長くなった人生をどう過ごすかといふその2点で一つの哲学のようなものをしっかりと持たなければいけないのではないのかな。今、寿命が長くなったことに戸惑っている状況だと思います。特に、社会制度の面とか、年金とかね。

**西村** 資源にしても、寿命にしても、有限であるといふことに対する意識といふものがあまりはっきりしなくなっています。もちろん全体としてですが寿命も漫然と長くなってしまっていて、資源にしても豊富にあるといふ漫然とした前提でどうしても使ってしまう。有限であることの自覚によって大切に仕方が、江戸時代の人たちの暮らしぶりにはうかがえます。修理を重ねて、それに伴っていろいろな仕事も出てきたといふこともあったようです。

家族の中でも幼くして亡くなる兄弟がいたり、あるいは自分の子どもでも全員が元気で成人するわけではないという状況での命の捉え方といふのと、長寿であることが当たり前であったり、資源をふんだんに使うことが当たり前という感覚ではだいぶ差がありますね。その辺りが余



計に、今回のようなコロナ騒動で冷や水を浴びせ掛けられたようになっていたのか、戸惑いが多いのかなとも思います。

**鬼頭** 資源について有限ということはもう30年、40年言われ続けてきたけれど、近代になって寿命が有限であることはあまり意識されなくなったということが大きな問題だと思いますね。だって、生まれてこのかた、ずっと寿命は砂漠の蜃気楼の水のようにどんどん近づけば近づくほど先へ行ってしまいます。私は1947年生まれですが、この年に初めて男女共に寿命が50年になったわけです。だから、生まれたときは、魔法使いのおばあさんに、「あなたの寿命は50歳だよ」と言われたようなもので。だけど、だんだん寿命が延びてきて、今は女性では80歳をはるかに超えてしまっている。男性もほぼ80歳というところまで来ていますよね。その歳になってみると、まだ寿命が残っていたというような時代になっている。それも、ほんのひと握りの人ではなくて、大勢の人が長寿を全うできるようになってきた。そうすると、しばらくの間、ほとんど死というものを意識しないで過ごすような状況が続いてきたのではないか。もちろん、身近では、どなたか亡くなることはあるし、もちろん災害や事故、病気で大勢の方が亡くなってはいるけれども、そういうことに多くの人が日常的にあまり接しなくなってきたということがありますよね。死が遠ざかっているということがあるかと思います。

## 死の季節性について

**西村** 死の問題についてもう少し歴史的なお話を聞いておきたいと思います。江戸時代の、例えば、どの季節に亡くなる人が多いとかといったことについても先生の著作で取り上げておられましたが、その辺りについても簡単にご紹介いただけないでしょうか。

**鬼頭** いつ死ぬかというものも時代と共に非常に変わってきました。現在、何月に人が多く亡くなるかという季節性についてはあまり明瞭なパ



ターンはないですが、どちらかといえば冬に亡くなる方が多い。寒い時期に肺炎、気管支炎で、特に高齢者の方が亡くなることが多い。だけど、ほとんど季節性というのはなくなってしまった。これは、心疾患であるとか、血管系の疾患というのは寒くてもいけないし、暑くてもいけないということがあるのかもしれませんが。がんのように季節を問わないというものもあるのかもしれませんが、死因との関係で、あるいは医薬や生活様式との関係で季節性がほとんどなくなったと言っていいと思います。

ところが、明治時代に、一番怖いのは夏でした。その痕跡は第二次世界大戦ぐらいまでは残っていました。私が子どもだった1950年代でも夏は怖い時代だった。夏休みに入る時期に必ず注意されたのは、汚い川で泳いではいけませんとか、自転車のアイスキャンディー売りでものを食べないようにしましょうとかね。とにかく怖いのは、当時の言葉で言えば脳膜炎です。今だったら、脳脊髄膜炎ですが、もしかしたら、熱中症も入っているのかもしれませんが。それと、もう一つは下痢、腸炎ですね。特に、当時は赤痢とか疫痢が子どもにとっては怖い病気だった。

こういう状態は明治時代にきわめて顕著で、夏に非常に高い死亡率の山があって、それから、もう一つ、冬にも、1月、2月に山がありました。1月、2月の山は今と似ていて、肺炎、気管支炎が中心ですし、もちろん、インフルエンザもそうです。それから当時の暖房は、農家なら囲炉裏、都市ではこたつか火鉢しかないですから、やっぱり、冬のすきま風が入って非常に寒い。そういう状態で、トイレも外にあたりする。夜中にトイレに行って脳卒中を起こしたり、心臓まひを起こしたりすることは珍しくなかった。そういうふうな生活様式、あるいは生活水準の違いによって、夏、冬に病気が集中する。特に、夏場に消化器系の病気、感染症が集中して起きるといのが大きな特徴でしたね。

ところで、戦前まで続いていた夏の大きい山と冬の小さい山を持ったツインピークス型の季節型がいつ生まれたかという点、実は、これは歴史的な産物で、全国的に一般化したのは江戸時代に入ってからです。それより前は、近畿地方では早くから夏季集中のパターンが出てきていた

という説がありますが、戦国時代までは春から夏にかけて、特に初夏を中心に死亡が多かったという報告があります。これは過去帳の研究から分かってきたことです。

それはどうしてかという、河川の下流域には低湿地帯がたくさんあって、水がはけない、しょっちゅう水がピタピタたまっているような湿田がたくさんあった。江戸時代に大規模な干拓事業を行うことによって土地がだんだん干上がって、いわゆる乾田と言われる、稲刈りの時期に水を落とすことができる田んぼへ変わっていくわけです。江戸時代の初めはまだまだ湿田が広がっている。そういう所では、米はできるけれども、裏作の麦の栽培ができない。そうすると、米だけで生きていかなければいけない所がたくさんあったわけです。そういった所では、米の収穫が悪かった翌年などは在庫がなくなってしまって、いわゆる端境期には普段でも米が足りなくなるのですが、麦が取れない所では決定的に食べるものがなくなる。そういうことで、4月、5月、6月の辺りに死亡の山が来るということが常態だったらしいです。

江戸時代でも、全体的には夏場に消化器系の病気で死ぬ人が多く、特にコレラが入ってくる19世紀にはそのパターンが強くなりますが、天保期などを見ると、飢饉があった1830年代には、江戸時代以前の古いパターンが出てくるわけです。天明期、天保期のような飢饉のときには、春から初夏にかけて死亡が増えるというパターンが時々出現しました。だけど、江戸時代には大体、夏に山が来る。このような人の死に方というのは死因が変わったということですが、同時に、社会を支えるインフラであったり、技術であったり、そういうものの影響を強く受けていたのですね。

**西村** 先ほどの通過儀礼の話で、乳幼児期に死亡が多くて、ようやく少し成長できてそれを祝い、成人したことをみんなで喜ぶといったことがあるのと同様に、季節においても年中行事では、今も7月前半には各地で祇園祭がありますが、疫病封じであったり、年の初めには、1年の豊作祈願であったり、あるいは秋の収穫の祝いであったりと、そうした

ことが非常に強いリアリティーを持って感じられていた時代なのだろうなと思います。人の死亡の季節性ということをはかっていますと、恐らく、近世の人たちにとっての年中行事はそうしたことが余計に肌身に染みるような感じで存在していたのではないかなと想像しました。

**鬼頭** おっしゃるとおりですね。特に、祇園祭というのは疫病退散ですね。そういう観点からすると、今回もアマビエというのが今年流行って、うちの近くの和菓子さんでもアマビエのお菓子を売り始めています。静岡だけじゃなくて日本全国あちこち、洋菓子屋さんも含めてやっているみたいですね。何か得体の知れないものが出てくると、そういう病気を退散させるためのシンボルが使われることがあるみたいですね。

**西村** ある種、迷信じみているとも思いますが、先の見えなさに対する祈りと言ったらいいのでしょうか、そうした面もいろんな形で現れてきているような感じがします。

## 新しい生活様式から新しい秩序へ

**西村** 最後に、今後のことについて幾つかご意見をいただけたらと思います。例えば、今、新しい生活様式ということが言われていますが、生活習慣病に対する対応とまた違って、かつてのように感染症への対応が改めて突き付けられる時代状況の中で、江戸時代の環境に対する向き合い方などを念頭に入れながら、今の現状を捉え返したときに、この新しい生活様式に対して、先生はどういうふうにお考えですか。

**鬼頭** 冒頭で人口密度と新型コロナウイルス感染症の関係は非常に密接ですと申し上げましたが、そういう点では3密を避ける、ソーシャルディスタンスを保つという点で新しい生活様式は理にかなったものであると思います。しかし、私はマナーとか作法とか、その程度の行動様式の変容だけで全て片付くとは思っていません。

新型コロナウイルスは確かに、飛沫感染や接触感染をする典型的な感染症ですが、他の新たな感染症や、古い時代の感染症の復活が、過剰な開発による環境破壊、あるいは温暖化による気候変動などによって、次々に出てこないとは限らない。そういうことの一つの象徴として、今回の新型コロナウイルス感染症を捉えなければいけないのではないかと考えています。そうすると、単に新しい生活様式を守っていれば片付くというものではなくて、現代のこの文明の在り方そのものの根底をもう一度よく考えてみるという必要があるのではないか、そのきっかけになるのではないのかなと考えています。

新しい生活様式というのはコロナ以前から、例えば大正期のスペイン・インフルエンザの場合も同じことが言われていたわけです。これからのような生活様式、それも単なるライフスタイルという意味ではなくて、生活の基盤から、例えば、エネルギーはどういうものを使うのか、どういう経済システムがいいのか、都市の在り方はどうなのか、交通の在り方はどうなのか、いろいろと社会基盤を大きく変えていくということがどうしても必要だし、それから、長くなった一生をどう過ごすか、季節の変わり目を楽しみつつ、感謝しつつ、季節の変化を大事にするとか、今までばらばらに変化してきた社会全体の仕組みを大きく整えて、新しい文明をつくっていくということに踏み込まないといけないのではないのかと思います。

過去の人口増加の時期には、常に新しい要素を取り込みながら、新しい生活様式や文明をつくってきたということで共通しています。江戸時代には、新大陸由来の作物を取り込みながら中国の新しい農業技術を導入し、ヨーロッパからも印刷技術を取り込みながら新時代の文明を生んで、社会の仕組みも変えてきた。

それと同じように、幕末から明治にかけてスタートした産業文明は、その成果として経済成長、人口増加、寿命の延伸など、評価すべきことをいろいろもたらしました。それを今度はどう調和させて安定したものにしていくのか、納得できるものにしていくのか、そこに宗教も含めた新しい文明というものを完成させる時代なのではないか。新しい生活様

式というのは、そこまで行かないと本物にならないのではないかなと思っています。

先ほどガボールの『成熟社会』に触れましたけど、最近になって後書きを読んでみたら、出版翌年の1973年に日本語の翻訳を出したのは、東京工業大学の教授もされた林雄二郎さんが率いる当時の経済企画庁の若手の研究者たちでした。

これを受けて、昭和50年(1975年)の『国民生活白書』がこんなことを言っています。「戦後30年間はわが国にとって、そのほとんどが物的豊かさをつくりあげるための歴史であった。速い経済成長の中で生産力は高まり、国民生活は向上した。消費財は豊富に作られ、消費された。そして、一人あたり国民所得や生活水準もほぼ先進国並みになった。こうした豊かさは、人々が生活していく上での貴重な土台であり、資産である。しかし、人々の求める豊かさの内容は時代と共に変わってきた。豊かさは、多ければ多いほど良いというものではなく、適切に制御される必要があることも知られるようになった。こうした視点からの反省は、すでに(昭和)40年代に入って始まったといえる。物質万能主義への反省、公害、自然破壊への反省、資源の無駄遣いへの反省などがそれである。また、内外の心ある人々によって豊かさの在り方についての警告が行われるようになった。そして、今日では、わが国の国内問題としてだけでなく、地球的規模の問題として豊かさの新しい在り方が求められている」(p.165)。

これが、1975年の『国民生活白書』です。政府のほうもそういう観点に立っていたのですが、その10年後にはプラザ合意があって、円高になって、一時円高不況が起きますけれども、その後バブルになって、この景気が泡と共にどこかに蒸発してしまった。今またSDGsの形で新しい豊かさを実現しようとする運動が日本へ戻ってきているのではないだろうか。1975年に問題提起されていた政府の白書が言っていることが、ようやく今、また本気になって日本で取り組まなければいけない課題として戻ってきているのではないか。もう45年経つわけですが。随分時間を無駄にしたようにも思えますし、その間に考えが浸透したり、ある

いは熟成したのかも分かりませんが、もう一度そこに立ち戻って、この新しい生活様式というのをうわべだけではなくて、根底から変えていく、あるいは新しい秩序をつくっていくという方向へ動いたらいいなと思っています。

**西村** 本当に、今後に向けていろいろとヒントをいただけるお話でした。どうもありがとうございました。

## 注

---

- 1) 速水融(1929~2019)氏は、日本常民文化研究所を経て、慶應義塾大学、国際日本文化研究センター、麗沢大学教教授。経済史家、歴史人口学者。日本学士院会員、文化勲章受章(2009)。遺著『歴史人口学事始め—記録と記憶の九〇年』筑摩書房(2020)。
- 2) 速水融『歴史人口学研究—新しい近世日本像』(藤原書店、2009年)。
- 3) 例えば、「忘れられたパンデミック スペインインフルエンザ」(上)~(下)『日本経済新聞』朝刊2020年4月15日~17日、「疫病の文明論」(1)~(7)『日本経済新聞』朝刊2020年5月4日~13日、「続忘れられたパンデミック 100年前の問いかけ」(上)・(下)『日本経済新聞』朝刊2020年5月5日・6日。